

〔塵袋十〕一坐ト云フハ一向キル心歟

ツ子ニハキルヲザスルトハ云フ、但坐字ヒザマツクトヨメル事モアリ、禮義記、武坐致右憲左何也ト云ヘリ、坐ヲバツミトモヨム、緣坐ト云、ソノ心也、

〔伊呂波字類抄〕坐作キスマヒ

〔倭訓栞前編四十三〕のすまひ 枕草紙に見ゆ、居住也、まひ反み也、或は坐作をよめり、

〔枕草子七〕碁をやんごとなき人のうつとて、ひもうちとき、ないがしろなるけしきにひろひをくに、をとりたる人のゐすまゐるも、かしこまりたるけしきに、ごばんよりはすこしとをくて、略下

〔倭訓栞前編十二〕すわる。居をいふ、すぐにをるの義なるべし、わとをと通ふ例多し、すうすと

はたらけり、わる反、をる反、ともいう也、

〔物類稱呼五言語〕居るといふ事を、日向及北陸道又下野邊にてねまるといふ、畿内にていしがる

いふ、關東又は泉州境邊にてへたばると云、伊豆にてきかると云、但馬にてへこたれると云、長崎にてをらすと云、土州にていざると云、

〔倭訓栞後編十四〕なをる。俗に正座をいふ、直く坐の義なるべし、ゐなをるともいへり、

〔名物六帖人事四〕正坐クニスル 傳、帝正坐、後儒林

〔伊呂波字類抄〕坐太端坐

〔遊仙窟〕端坐クツキ剩心驚

〔日本靈異記上〕女人好風聲之行、食仙草、以現身飛天、緣第十三

大和國宇太郡漆部里有風流女、是即彼部内漆部造麿之妾也、略中 每於野採菜爲事、常住於家、淨家

爲心、採調盛唱、子端坐含咲、馴言致食、常以是行爲身心業、略中

端坐シ支ミ乎奈與久 氏○訓釋恐有誤